

芥川龍之介「蜜柑」の英訳講義

— アメリカ人学生の反応を中心に —

平岡敏夫

1 はじめに

一九八七年九月から十二月まで、Fulbright Scholar in residence として、アメリカ東部ペンシルベニア州のディキンソン大学で、英訳テキストにより学部学生に講義した折のノートは、すでに筑波大学「文芸言語研究文芸篇」(89・9～90・9)に「蜜柑」(The Tangerines)、「奉教人の死」(The Martyr)、「羅生門」(Rashomon)、「藪の中」(In a Grove)、「お富の貞操」(Otomi's Virginity)の順序で発表、のち合冊して、“Remarks on Akutagawa's Works”(90・12、青鸞舎)として刊行したが、ここでは「蜜柑」(19・4)を取りあげ、そこで言及した一、二の問題をその後の自身の研究とをあわせて述べておきたいと思う。

アメリカでの講義の前に、「蜜柑」については、「日暮れからはじまる物語——『蜜柑』・『杜子春』を中心に——」(『芥川龍之介抒情の美学』82・11、大修館書店)を書いていたが、「或曇つた冬の日暮れである。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下ろしてぼんやり発車の笛を待つてゐた。」という「蜜柑」の冒頭と、「或春の日暮れです。／唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。」という「杜子春」(10・7)の冒頭がそろって日暮れからはじまり、冬と春の対照をなしている点をまず問題にしていたのである。

このことはアメリカでの英訳による講義でも取り上げており、英訳本がその冒頭を“One cloudy winter evening”としていることをまずリマークしている。「日暮れ」というのは昼と夜の境界であり、きわめて微妙な短い時間なのだが、それを“evening”としてのでは充分でないとして、“nightfall”“dusk”がふさわしいとしたのである。これはどの訳語がよいかといった翻訳論の問題ではなく、“evening”と訳されたとき、あらためて「日暮れ」ということが自覚されてくると

いった読みの問題であり、英訳者の英訳というかたちで示された日本語原文の読みを手がかりにして、逆に日本語原文を自覚的に読みなおそうというのであって、あくまで原文の芥川作品が私たちとしては対象なのである。

アメリカ人学生には、一編を読みあげることレポートを提出してもらったが、その中にいくつか印象に残る問題があったので、そのことについてここであらためて検討してみたいと思う。

2 第一印象を変える感動

「蜜柑」においてもっとも感動的な場面は、乗り合わせた小娘が見送りに来ていたらしい三人の弟たちに蜜柑を投げるところで、これは衆目の一致するところだろう。二等車に三等の赤切符を持つて乗ってきた小娘は、「云ひやうのない疲労と倦怠」の中にあつた主人公「私」にとって、「恰も卑俗な現実を人間にしたやうな」存在であつた。

私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だつた。最後にその二等と三等の区別さへも辨わきまへない愚鈍な心が腹立たしかつた。

下品・不潔・愚鈍と積み重ねるように「私」は不快感を表白しているが、これは意識的にとられた方法である。小娘が蜜柑を投げることによって生ずる逆転劇を強調し、その場面を深く印象づけるためには、ことさらに、娘を「卑俗な現実」の象徴とまでしておく必要があつたのだ。この点について、次のようなアメリカ人学生の意見はおもしろい。

‘Changing the First Impression, — Elizabeth Schwartz:

Our first impressions of people are often quite difficult to alter, even after a significant passage of time. What we have a tendency to overlook is the fact that first impressions are primarily subjective. We make judgements based on our perceptions of “right” and “wrong” and even on our temporary moods. The latter example is portrayed by Akutagawa’s narrator of the short story “The Tangerines.” When a young girl enters a train car one evening, the narrator’s initial perception of her is truly a reflection of his own dismal outlook on life. As the train travels on-

ward, the first impression changes faster than in the average process.

エリザベスは、私たちの第一印象は、相当の時間がたつても変えるのが全くむずかしいとまず言っている。そして、見のがしやすい傾向は、第一印象というものが何より主観的だという事実であり、私たちはよいかわるいかの知覚、一時的な気分さえもとづいて判断を下す。後者の例が芥川の短編の「蜜柑」の語り手によって描かれている。

ある夕方、小娘が列車に入ってきたとき、語り手の彼女に関する知覚は、まさに彼自身の憂鬱な人生観の反映であった。列車が進むにつれて、最初の印象は、一般の過程よりもはやく変わった、とエリザベスは言い、以下その過程を具体的に検討してゆくのだが、なかなか変えられない第一印象を、よりはやく変えるに至ったのはむしろ強烈な感動によるのであり、蜜柑を投げるといふ行為は、小娘に異なる光 (a different light) をあて、語り手の世界にも新しい光 (a new light) をあてたと述べている。この瞬時の感動は、語り手の憂鬱な存在の中にくみこまれ、同じように読者をも明るくすると結んでいるのだが、このハッピー・エンド風な、いかにもアメリカ人学生らしい楽天主義はともかくとして、変えるのが困難な第一印象を変えたというところから、小娘に異なる光、新しい光をあけるといった表現に従来なかったおもしろさを感じたのである。

3 何が人を美しくするか——ビューリタンの理解

同様の意見から、さらに進めた例がある。

Kimberly A. Harrison:

Ryunosuke Akutagawa in his story "The Tangerines" has an interest in "the beauty of the moment." In the story, it is the power of one moment which totally transforms the opinion of the narrator in the story. In the beginning of the narrative, it is clear that the narrator finds the country girl, who shares the train ride with him, very unappealing because of her physical appearance. However, the moment in which the girl throws the tangerines to the young boys from the train window changes his opinion of the girl. It is in "the beauty of this moment" that the narrator is

able to see the true beauty of the country girl; it is a beauty within.

The narrator's description of the country girl in the beginning of the train ride is very derogatory. At this point in the story, he finds the girl repulsive because of her external appearance. The narrator describes the girl's "physique" with many adjectives which are not flattering.

キンバリーも、語り手の意見を全的に変えた一瞬の力（刹那の美しさ）について書いている。はじめは小娘にはその身体的な外見ゆえにひかれなかったが、男の子たちに汽車の窓から蜜柑を投げた瞬間、彼女についての意見を変えたと言う。汽車に乗ってきたときにはきわめて軽蔑的なものだったのは、彼女の外見ゆえの反発で、多くの形容詞で小娘の身体を叙述しているとして例をあげているが、キンバリーのめざすところは、次のような彼女の結論によって明らかだろう。

In conclusion, the "beauty of the moment" can be seen as a very powerful force in Akutagawa's story "The Tangerines." It is because at one beautiful moment that the narrator in the story is able to recognize the true essence of what makes a person beautiful. The narrator learns that beauty can not be judged only in terms of external appearances; sometimes it is the inner, spiritual qualities, like the love, caring, and generosity of the country girl, which create the true essence of beauty.

蜜柑を投げるといふ「刹那の美しさ」を、“Powerful force”ととらえているところはたいへん重要で、何が人を美しくするかについての真のエッセンスを認識し得たというあたりから、キンバリーのめざすところがわかってくる。美は外見だけで判断できず、小娘の愛、心くばり、寛大さのごとき内的・精神的な本質によるといふことを語り手が知ったところなど、芥川ならずとも苦笑するかも知れない。たしかにこういう読みもありうるし、あつてよからうが、キンバリーに対して私が次のようにコメントしたことをもつけ加えておこう。

My comment on Kimberly's — I think your paper is nearly perfect. Every time you write very well. Especially, this last one is the best, or no less excellent than before. You caught part and parcel of this story and Akutagawa.

You are also able to recognize the true essence of what makes a person beautiful. This recognition is apt to lead moral appreciation of the story. People have a tendency to appreciate literary works morally. I think that I can find such a tendency more in American students than in Japanese, because of Puritanism in the United States.

人を美しくするものの真髄を認識するとうとき、それはこの短編の道徳的評価を導き出す傾向があることを私は指摘している。一般に文学作品を道徳的に評価する傾向があるのだが、日本人よりもアメリカ人にそういった傾向が多いのはアメリカにおけるビュリタニズムによるのではないかと私は考えたわけである。かつて、私が学生時代に参加していたバブルクラスの若い女性宣教師は、映画や芝居、さては小説まで害があると言ひ、きわめてストイックであったが、内村艦三が帰国の折、鞆の奥底にこっそり『クオ・ヴァデイス』を隠して持ち帰ったという話まで想起される。そこから一歩退いても、ビュリタンにとっては、小説というものは何が人を美しくするか、その本質について教えなければならぬものなのである。

Nick Bates:

There is a lesson to be learned from the narrator's change of attitude towards the country girl. From the outset he judges the girl based on her appearance. The narrator seems to be able to categorize for himself everything about the girl solely based on what she looks like. An example of his attitude: "Lighting a cigarette and partly wishing to forget her depressing presence." First of all, the narrator finds her presence depressing, based on her looks. He lists things like her hair, cheeks, and clothes as ample proof for justifying his conclusions about her. What about her expression? Is the country girl smiling? Do her eyes have any twinkling in them?

右のニックという学生は、キンバリーと同様、いやそれよりもまして文学的なセンスを豊かに持っている学生と思われるが、右の引用部分に先立つ部分では、語り手の眼を通して読者が田舎娘を「見る」方法に注意し、「語り手に生じた態度の変化はまた読者の内部でも生じるのであり、この短編のより深い理解を可能にする」と述べている。

それにつづく右の引用では、田舎娘に対する語り手の態度の変化から学ぶべき教訓があるとする。はじめは、語り手は

田舎娘をその外見で判断しており、彼はたんに田舎娘がどのようなものに見えるかということ、彼女のすべてを片づけうると思っていたとして、例をあげている。彼女についての語り手の結論を正当化するための十分な証拠として髪・頬・着物などがあげられているわけだが、「田舎娘はほほんでいたか？ 彼女の眼はきらきらと光ったいたか？」などと問いかける文体にも力がある。しかし、ニックの言う「教訓」^{レクソン}とは何だろう。それはキンバリーと同様、やはり田舎娘が蜜柑を投げる場面で出てくる問題なのである。

At the end of the story the narrator is able to witness a moving display of affection between the country girl and her brothers. As a result "I turned slightly and looked at the young girl as though she were a different person." The narrator has a different opinion of the girl based on this encounter. The author used this encounter to open the eyes of the narrator, so that he may understand the girl based on her inner being rather than her outer. This also opens the eyes of the reader who was holding incorrect opinions about the girl based solely on her looks. This story makes the point that there is more to a person than his/ her looks. And if the reader is not careful, he will start judging someone based on appearance and not the inner spirit, just as the narrator did. It is learned that unattractive, even seemingly selfish people, can be very loving inside, and that such judgements are often made based on biased information. The reader is introduced to the country girl, who certainly is not as attractive as Lorenzo, but has a similar loving spirit. Akutagawa is making a strong statement about person's quality and how it should not be derived.

結びで語り手は、田舎娘と弟たちの愛情の感動的な表出を目撃できたとして、「私は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るやうにあの小娘を注視した。」を引いている。ちょっと横道にそれるが、授業で私が注意しなかったので今書きとめておくと、原文で「私は昂然と頭を挙げて」とあるところ、英訳では「I turned slightly」となっている。「ちょっと向いて」などというものではなく、「昂然と頭を挙げて」には強い感動によつて「私」がこれまでの憂鬱な、けだるい状態から打ってかわった力強い緊張に満たされていることを示している。それが「別人を見るやう」な小娘への注視となつてあらわれているのである。

ともあれ、ニックは語り手が小娘の外面よりも内的なものにとづいて彼女を理解するように、作者はこの出会いを語り手の眼を開くべく用いていると言ひ、それはまた読者にとつても同様で、人間には外見より以上のものがあることをこの短編は主張していると述べている。ニックはこのことをくどいほどくり返し指摘しているが、魅力的でない、利己的な人間と思われる人でさえ、その内面は、深く愛しうるものであり、誤った判断はしばしば偏った情報にもとづくものであるということを見せているとも書いている。小娘は「奉教人の死」の「ろおれんぞ」のように魅力的でないが、同じような愛する心を持っているともくり返し、直訳すれば「芥川は人間の本質について、そして、それがいかに引き出されていなくにかについて、強い申し立てをしている。」とするのである。ここにニックの言う「教訓」が明らかで、こういう作品理解に、健全なアメリカ社会の、そしてビュリタリニズムの、文学とのかかわりを見るのである。

ニックのレポートに対し、私は次のようなコメントをつけて返したこともつけ加えておこう。

My comment on Nick's — 'The Tangerines' taught us a lesson that people shouldn't judge the other person on his/ her appearance, because he/ she might have a beautiful heart inside. That's of course right. As you know, this story is not a didactic story. I believe that Akutagawa wouldn't intend to give us such a lesson. He only wanted to write that there might be a beautiful moment even in the gloomy life. Your former comment in this paper concerns 'the moment' and the relation between the narrator and reader. That's right, too. I am very happy to read your excellent paper every time.

「蜜柑」が教訓小説ではなく、また芥川がそのような教訓を私たちに与えることを意図したわけでもなく、ただ憂鬱な生活においてさえ、美しい瞬間のあるかも知れぬことを書きたかったのだとあえてニックに書いたのである。

4 「蜜柑」は心理的・哲学的考察

しかし、こうした作品理解をするアメリカ人学生が大ざっぱというわけでもないので、たとえば、はじめて英訳「羅生門」によって日本文学にふれたシヨーンは、アメリカ文学とも西欧文学とも非常に異なっており、スタイルと表現におい

てシンプルであるが、イマジナリイと叙述においてリッチであると書いていた。そのシヨーンは、「蜜柑」について次のように述べている。

Sean Pickard:

This is a very interesting story by Akutagawa. I think I enjoy his psychological and philosophical studies more than his straight-forward short stories such as "Rashomon" or even the beautiful tale of "The Martyr". I would be interested in reading more stories like "The Tangerines".

(My comment on Sean's) — I wonder if 'Rashomon' is a straight-forward short story. 'The Martyr' is of course beautiful tale. I am very interested in the appreciation that you consider this story psychological and philosophical. Jennifer writes 'This ("The Tangerines"), perhaps, is best of all'.

「羅生門」のような、ストリート・フィクション平明な小説、あるいは「奉教人の死」のような美しい話よりも、いっそ「蜜柑」には心理的かつ哲学的な考察があるとシヨーンは読んだのである。「蜜柑」のような作品をもっと読みたいと言うシヨーンに対し、私は「羅生門」が平明な小説かどうかは疑問だが、心理的・哲学的考察を見たことはたいへん興味深いと書いておいた。「羅生門」「奉教人の死」「蜜柑」と読みすすめて来て、ジェニファーなど「蜜柑」を第一としており、シヨーンの評価とも重なるのである。

この作品に芥川のアイロニイを感じとるデヴィッドのような読みも従来なかったものだろう。デヴィッドのレポートの後半を引こう。

David Silverberg:

In the scene of the falling tangerines, he sees that she is full of love and life and color. It strikes him so deeply that (according to Hiraoka Toshio's translation, not the textbook's) "the scene was so clearly branded upon my heart that I felt pain". He was overjoyed at seeing and experiencing such a sight, but it hurt him, because at that moment

he realized that it was he who was dull and lifeless. It is another example of how Akutagawa uses conflicting or "ambivalent" emotions to make a statement. We can see the hero's reaction in the last paragraph, which shows us the irony that Akutagawa wants the reader to feel. (Again according to Hiraoka Toshio's translation rather than the book's) "For a little while I could forget my intense fatigue and ennui, becoming oblivious to the unintelligible absurdity of my own tiresome, dull life."

原文から離れた英訳部分では、しばしば直訳について私の訳を示したが、デヴィッドは私の訳を引きつつ、「語り手」は蜜柑を投げる光景を見て大いに喜んだが、それは彼を傷つけもした。なぜならその瞬間、けだるく生気のない自身を知ったから、と言う。そこにアイロニーが生まれてくる。芥川はこのアイロニーを読者に感じさせたかったのだとして、「私はこの時始めて、云ひやうのない疲労と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅かに忘れることが出来たのである。」(傍点平岡)という結びを引いている。この原文の「僅かに」とあるところを、事もあろうに訳者は“Completely”、すなわち「完全に」忘れることが出来たとしているのだが、それではアイロニーも感じられるはずはない。私はこの点を授業で指摘し、“a little”か“a little while”として、“Completely”を消せと言ったのだが、何人かの学生はそこを聞きもらしたらしく、あるいは「この感動的な光景を見て、憂鬱な人生を完全に忘れて生まれかわった人間となつたとするような楽天主義のゆえに訳文を自然に受けとったのか、“Completely”と依然として書いた者もあった。アイロニーを読みとるか否かは別としても、小娘の行為に感動しつつも、それは僅かなことであり、逆に自分の暗さを自覚せしめられるという皮肉を読みとるものもなかなかのもので、私のコメントもやはりつけ加えておこう。

(My comment of David's) — Every time you write well. Especially, this last one is the best. Your appreciation of this story is deep and sharp. Some students think that 'I' could forget the vargar and wearisome life *completely*, according to the text-book. You might be only one to point Akutagawa's irony and gloomy life.

まさに芥川のアイロニーを指摘したのはデヴィッドただひとりで、日本においても同様のはずである。このことにも関連してくるが、小娘の希望と夢に言及したステイプの例がある。

'The girl's hopes and dreams' - Steven M. Weber :

He realizes her purpose when he sees three young ruddy-faced boys running towards the train. The girl waves and throws several tangerines to these boys, who are obviously her little brothers. The narrator realizes that she is rewarding them for coming to see her as she leaves home to go to work for the first time. He is filled with admiration for this girl and realizes that she is a person with a family, who obviously has hopes and dreams, not unlike himself. He confesses to having lost his earlier weariness. This impression could only have occurred in a situation where he could actually get to know her character.

(My comment on Steven's) - You can understand this story well. I am interested in your addition to the girl, her hopes and dreams that we can hardly find in her appearance. Do you believe that he could have parted his wearisome life after this? You should know he lost his earlier weariness *in a while*.

はじめて働きに出るといふのは原文に書かれていないが、よい読み取りだろう。この小娘には家族もあり、彼とはちがつて、彼女は明かに希望と夢があるといふところ、これも原文にはない読みである。暗い人生に疲れた彼とは対照的な彼女であり、希望と夢に対比していけば、デヴィッドのようなアイロニーも生まれてこようが、ステイプは、私のコメントが示すように、彼のはじめの疲労が消えたのが、「僅に」であることの自覚はなかったように思われる。ROTC（士官訓練コース）に所属するステイプはいかにも軍人の卵らしくきびきびと私の最初の授業「羅生門」のスライド設置を手伝ってくれたし、のちに「藪の中」でも真犯人発見のレポートを敢然と書いてくるのだが、この希望と夢の発見も、アメリカ人によくある楽天主義のなせるわざかも知れない。しかし、アイロニーといい、ホープとドリームといい、従来それと言った人は日本にもいなかったことはたしかである。

5 蜜柑は神の恩寵

私の講義ノートには、他に何人ものアメリカ人学生の「蜜柑」に関する意見が収録されているが、それらはノートに譲り、最後にもっともユニークな読みがマイクから出ているので、それについて紹介と論評を加えてみよう。

'From the heavenly skies' – Michael Piker:

"Then as though from the heavenly skies upon the heads of the little children fell five or six tangerines dyed with the warm fiery color of sunshine..." Tangerines grow in nature with the help of god. When the country girl threw the fruit, it was the help of god. When the country girl threw the fruit, it was like an unborn baby coming alive for everyone to see and cherish. God made the tangerines bright because new life is bright and he wanted to make the moment memorable for the three little boys.

蜜柑を投げる光景は芥川の原文では次のように書かれている。

窓から半身を乗り出してゐた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのはして、勢いきほひよく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて来た。

英訳分とそれを修正した私の訳の部分をまず挙げておく。

"The scene of falling tangerines." – Then, as though from the heavenly skies upon the heads of the little children fell five or six tangerines dyed with the warm fiery color of sunshine..." In the original, "Then, five or six tangerines dyed with the warm color of sunshine as to beat heart fell upon the heads of the children from the sky." (my literal translation). "Heavenly" the translator adds to the sky, will invite students to read this scene more deeply.

Akutagawa depicts the color of tangerines with the warm color of sunshine, because the tangerines are the symbol of the sister's love for her little brothers. "The warm fiery color" in the text is problematic because "warm" is in contradiction with "fiery"

「あたかも小さな子供たちの頭上の天国の空からのごとく」というのが英訳テキストであるが、原文には“as though”

にあたる表現はなく、ただ「子供たちの上へ」「空から」降つて来たのである。「from the sky (skies)」と訳せば済むところを、訳者は“heavenly”をつけ加えた。そのために、マイクのようなキリスト教的な精神を意識した読みが生じてきたものと考えられる。まして子供たちの頭上の「天国の空」なのである。

マイクは言う。「蜜柑は神の助力で自然の中に生長する。田舎娘がこの果実を投げたとき、それは神の加護によるものだったのだ。田舎娘がこの果実を投げたとき、それは人々が見て大切にすべくこの世にやってくる、生まれる前の赤ん坊のようだった。新しい生が輝かしいものであるゆえに、神は蜜柑を輝かしいものにし、三人の男の子のために記憶すべき刹那を造られたのだ」と。これを書きつけているマイクの感銘が伝わってくるかのようだが、三人の男の子のみならず、語り手にとつても、この蜜柑は神の思寵のごときものであったかも知れない。「言ひやうのない疲労と倦怠」、そして「不可解な、下等な、退屈な人生」にとりつかれている「私」にとつて、この蜜柑はまさに神の加護による恵みであり、「僅かに」であるにせよ、そのような気分、そのような暗い人生を忘れさせるものであったのだ。

だが、右のような読みが原文において許されるかどうか。芥川は「空から降つて来た。」と書いている。英語の“fall (fell)”では、落ちて来ても、降つて来ても同じだろうが、日本語の「降つて来た」は「空から」と結びついており、“fall (fell)”を「落ちて来た」でなく、「降つて来た」の意に働かそうとして、訳者はあるいは「空」に“heavenly”をつけたくなつたのか、それともただ「空から」に宗教的なニュアンスを感じたからなのか。このあとには「小娘は、その懷に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて」とあつて、明らかにこの蜜柑は窓から投げたところから見て、正確に表現されている。ところが、子供たちの上へは「空から降つて来た。」となつており、子供のいる地点あるいは視点からすれば、「空から」になるのではないかという考えも出てくるだろう。それはたしかにひとつの説明にはなるが、「彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃つて背が低かつた」にせよ、踏切りから見上げる汽車の窓が空ほど高いはずはなく、窓から半身を乗り出している姉の姿はつきりと見えたはずだ。

とすれば、芥川は当然「子供たちの上へばらばらと窓から落ちて来た」と書くべきところを、あえて「空から降つて来た」と書いたということになってくる。そこには象徴的な意味が含まれていることになるのであり、訳者が“heavenly”をつけたくなった気持ちもわかるように思われるのである。つい最近、韓国で「蜜柑」を中心に芥川文学を講演する機会があったが、韓国語の「空」하늘(ハヌウル)にはもともと神の意が含まれているという。「空から降つて来た」を韓国

語にそのまま訳せば、おのずから“heavenly”のニュアンスが出てくることになる。日本語の「空」にもそうした意味がまったくないと言い切れないかも知れぬが、そういう場合は「空」でなく「天」を用いるだろう。「蜜柑」の場合、「天から降つて来た」とした場合、あまりにもめざすところが露骨で、表現としてはまずい。芥川が象徴的表現をめざしたとしても、「天から」などと書くはずもなかっただろう。

曇天に押しすくめられたかのような、背の低い三人の男の子、陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた子供たちの上に、姉の蜜柑がさながら天からのように降つて来たのであった。三人の男の子だけではない。それを目撃した「私」にも「或得体の知れない朗な心もち」を引き起こし、憂鬱な人生をしばしの程忘れさせたのである。「私」にとっても、蜜柑は「空から降つて来た」ものだったのである。自殺の前に、「西方の人」「続西方の人」としてイエス・キリストを描き、聖書を胸にのせて逝つた芥川を思うと、マイクのような読みは、地下の芥川にとっても自身の心を感じとってくれた読みとして、うなづくべきものではないかとも思われる。

芥川は三人の男の子を残して去った。「蜜柑」の三人の男の子とのふしぎな暗合についてはすでに記したことがあるが(90・1・27「東京新聞」『塩飽の船影』所収、有精堂)、「蜜柑」発表の折には長男すら生まれていなかったにせよ、蜜柑は“it was like an unborn baby coming alive for everyone to see and cherish”だったのだ。芥川の三人の男の子にも神の思寵はあったのである。

「蜜柑」英訳講義に得たアメリカ人学生の反応の一端を述べたが、「蜜柑」という短編にとっても、それはひとつの恵みともいふべきであろう。